

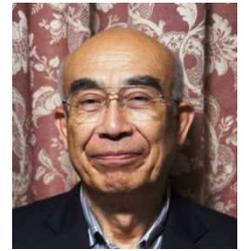
河内の文化遺産を守る会（茨城県常陸太田市）

あんどんで地域の元気発信！

河内の文化遺産を守る会

会長

ひやま さだと
檜山 貞人



1. 常陸太田市河内地区の概要

河内地区は茨城県最北の人口54,000人の常陸太田市の中央部にあり、4町1,200人が暮らす地域です。清流「里川」と地域面積の50%以上が阿武隈山系の山脈に囲まれ、風光明媚な土地柄に住むにはとても良いところですが、少子高齢化が進み小学校も平成23年度で閉校となり、商業も農林業も停滞し、兼業農家の多いところですが、休耕地の増加で田畑が荒れてきています。古くから宿場町として栄えましたが、市内中心部が発展する中で、過疎化に拍車がかかるとともに、地域の歴史や遺産が忘れ去られてしまう状況も懸念されるようになりました。

2. 活動開始の背景・経緯

◆活動の開始

この地域には、それまで水力発電の変電所として任務を終えた「旧町屋変電所」が公民館や体育館代わりとして昭和30年から利用されてきました。平成になって小学校校舎や体育館が新設され、また、公民館もふれあいセンターと併設で新築されたことなどから、「旧町屋変電所」は公民館としての役目を終えることとなりました。平成5年に維持費用の問題などもあって、市当局から存廃について地域住民の意思が問われることとなり、存続の賛否を問う投票を行ったのですが、残念ながら廃止が優勢という結果となりました。しかし、歴史ある建物を何とか存続させようと、平成6年8月、保存運動の会を結成し、活動した結果、保存することが決定されました。保存運動を実行した人達が組織されたのが「河内の文化遺産を守る会」です。

一部赤レンガ造りのこの建物は、ドイツ人の設計によるとされています。東京駅に代表されるように年代的にもこの当時はレンガ造りの建物が全国に建てられています。遺すこ

とによって、地域財産としての存在意義を高めながら、「旧町屋変電所」を心のよりどころとして、地域を元気にしようと守る会の活動が始まり、建物の保存管理を続けながら、歴史家を招致して講演会などを開催したりしていましたが、その結果、平成11年には、活動の成果が実り国の登録有形文化財にも登録されました。



◆活動転換のきっかけ

そのような中、新たな取り組みを模索していたところ、平成16年4月、花見を兼ねた定例会（草刈・清掃など）の中で活動転換のきっかけとなるまつり開催の話が出ました。「旧町屋変電所」の北側に広域農道が開通し、そこからの眺めが一変したからです。会員から「眺めも良くなったし、酒でも飲みながら何かやっぺ。」という話になったのです。きっかけはちょっとしたことでしたが、7月にまつり実行委員会を立ち上げて、まつり開催の準備を始めることになりました。

3. 具体的な活動

◆まつりの開催

何も無いところから、手探りでスタートでした。田畑を利用するため、収穫が終わってからの秋に日程を設定。紅葉が見事な銀杏の木が隣り合わせていることから「赤レンガと銀杏まつり」でネーミングが決定しました。

今やまつりの顔となっている「あんどん」は、ひな祭りでも有名な真壁町（茨城県桜川市）開催の「灯りのイベント」からヒントを得て作り始めました。篠で四角錐を試作しまし

たが、高齢会員から「篠は虫がつきやすいから竹が良い。」ということになり、竹に障子紙を張る現在の形になりました。最初は30～50個のあんどんを通路に並べる位の話が、高齢会員の頑張りでも初年度500個もの数を完成させることが出来ました。その頑張りもすごいものでしたが、周りの人達や企業が本当によく協力してくれまして、横断幕や大きな写真パネルなど様々なものを提供してくれました。



まつり初日に木枯らし一番が吹き、並べたあんどんが倒されてしまうと、「篠を切ってつかえ棒に」といって、ある会員が山に入り、あつという間に準備をしてくれました。思えば、当日の雨がやっやんだのが昼時、市担当部署には開催の問い合わせが殺到しました。「雨がやまなくてもいいから並べっぺ！」と必死で午後3時の点灯式に間に合わせた時もありました。長靴で雨でぬかっている中を、いつもの倍の労力を使い、通常3日かかるところを3時間でやり遂げました。「今日やったんですかー!?!すごいきれいーっ!!」と喜んで頂きました。「どうせやるなら一番良いものを見せっぺ。」というおもてなしの心がそうさせたのでしょうか。

◆まつりの準備と工夫

あんどんの製作開始は、暑い8月（2月と8月の竹は虫がつかず良いから）。最初は高齢会員が電動きりなどを個人で買入れて製作作業がスタート。朝から始まり、昼食は自宅で摂り、午後また集まって製作。数人で毎日作業を続けました。500個を点けて見るのはまつり当日誰もが初めて。すごく感動しました。小学校校庭の駐車場から「滑入橋」に入

ったとたん「なによこれっ。」「こんなの見たことない。」といった声がたくさん聞こえました。私などは鳥肌が立ったのを良く覚えています。この感動がまつり継続の源です。材料の竹は自生のものを加工、台になる木は、製材所から無償で提供されました。紙は、製紙業者が裁断してくれます。

あんどんの絵付けは地元の小中学生に描いてもらいます。親は自分の子が描いた絵を見たいという親心を大切にすることからの発案です。一斉点灯式は家族で一緒に点けてくれます。皆で点けるので時間も労力も大幅に短縮されます。



◆来場者へのおもてなし

あんどんを見に来てくれる人の心を和ませようとコンサートの開催を考えたところ、色々な人の協力と演奏者のボランティアの心が開催を実現させてくれました。東京のプロの方が時間を割いて来てくれ「あんどんの中で演奏したくなる魅力ある会場だ」と話してくれています。あんどんの中で踊りたい、歌いたい、演奏したいとたくさんの申し出があり、ありがたく思います。82歳を超える連続10回出場の方も体調を整えてきてくれます。

寒い中、遠くから来る人の心と身体を満たすのは温かい食べ物です。けんちん汁などは、最高のご馳走で1,000杯が売れます。手打ち蕎麦は、地元の同好会の人たちが蕎麦の栽培から始めたものを提供しています。芋などは、農家から規格外のものを分けてもらい、販売しています。1トントラック満載で気持ちよくプレゼントしてくれます。

駐車場も充分でなく、課題もありますが、事故なく気持ちよく帰ってもらえるように係のものが注意を払っています。また、地元の駐在所も含めた警察や消防の協力は欠かすことが出来ず、寒い中、協力をしてもらっています。

地域には窯元が2軒あります。「一輪挿し花入れ」や「銘々皿」を製作し好評です。その中に日本伝統工芸展で入選する若い親子がいて、大変有望です。まつりを大事にしてくれていて「地元を中心にやります。」と言って来ています。心強い限りです。

85歳になる愛子さんの製作する「手づくりひょうたんランプ」の評判が高く、まつり参加を励みに毎年頑張って製作してくれています。

広報は、経費を節約して市の広報誌、新聞、ラジオ、テレビ、ミニコミ誌など無料でお願いできるところに頼み、記事にしてもらいます。また、活動を継承してくれている若い世代にホームページの作成をお願いして来場者への案内をしています。



◆活動資金の調達

まつりの販売による収益が大きな柱ですが、地元の書家の提供で墨彩画の「旧町屋変電所」と「央橋」を「絵はがきセット」にして販売しています。

女性会員が中心となり、草木染め手ぬぐいも製作しています。絞りを入れて手作りしています。染料の採取からラッピングまで13工程に及びますが、真心こめて作っています。まつりに対する思いが手に取った瞬間感じられます。

4. 活動の広がり

◆あんどんの貸し出し

幻想的なあんどんの灯りの評判は、他地域へも広がり、希望団体には貸し出しも行っていて交流の輪が広がっています。

水戸市のお隣の茨城町商工会青年部のイベントにも貸し出ししていて、町内の小学生全員に絵付けをしてもらい、2月の冬空にきれいなあんどんが飾られます。800個のあんどんが使われ、子供達と一体となった盛大なまつりとして青少年の健全育成

の一助になっています。

また、縁あって岩手県大槌町の被災地の盆踊り会場に108個のあんどんを贈り、被災された方々の心の支えになることが出来たのではないかと思います。



◆事業の促進

まつりの成果は、まつり開催時期以外でも地域に人が訪れるようになり、地域住民におもてなしの心が芽生えたことと、私達の本来の事業活動が充実したことです。

市の市民協働推進課のまちづくり提案事業を活用して平成21年から23年までの3年間連続して地域の案内パンフレットと冊子を製作しました。地域において埋もれそうになっている史跡の掘り起こしを通して、地域の良さを再認識することができました。毎年、フォトコンテスト写真展を開催しています。まつり開催以来、まつりや四季の風景を撮りに来てくれる方が大変多く、多数の方から応募があり、毎回90点以上の作品が集まります。

5. 課題と展望

活動を続けて行く中での課題としては、会員の高齢化と次世代への継承があげられます。高齢で最初からあんどん製作に携わった方が亡くなっています。2回目の5日前にまつりを楽しみにしていたながら病気で亡くなった方、一斉点灯式で高齢会員代表として点灯した方は、翌年に亡くなられました。どちらも90才前後の方でした。会員の多くが発足当時や高齢会員の想いをしっかりと受け止めて活動に取り組んでいます。特に若い世代の人たちは、その子供達のために、危機感を持って活動に参加してくれています。あんどんの素晴らしさが毎年クローズアップされて地域の元気を発信することと地域一体となって活動に取り組んでいくことが次世代への継承につながっていくと確信しています。